
【APH】パズル

金木犀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【APH】パズル

【Nコード】

N2082X

【作者名】

金木犀

【あらすじ】

平和な街・ルーカスに住む青年アルフレッドはある日、知り合いの王耀に頼まれて街の奥の森を訪れる。

その森の中で見つけた大きな屋敷に入ったアルフレッドは漆黒の髪と瞳を持つ引きこもり青年の本田菊と出会う。

少し謎めいている菊と共にアルフレッドはルーカスで起こる不可解な事件に巻き込まれていく……

Episode 1 (前書き)

新連載だぜイエー

くだらないぜイエー

というわけでこの小説は菊とアルフレッドが主人公？です

どうか生暖かい目で見てください……

Episode 1

世界のどこにあると言われる街・ルーカス

この街は面積が広く大都市であるにもかかわらず今まで一度も事件がないというとても平和な街であった

街には金髪の人や黒髪の人がいたりと様々な国の人間が住んでいてみな差別なく仲良く暮らしていた

そしてその街の中心にある通り、リーガル通りをある青年が歩いていた

青年はぴよんとはねたアホ毛が生えた金髪に青い瞳でメガネをかけ、服の上に茶色のジャケットを羽織っていた

紙のカップに入ったコーラをストローですすりながら青年は退屈そうに空を眺めていた

「あー、もう平和過ぎて退屈なんだぞ……………」

青年の名はアルフレッド・F・ジョーンズ

街で1番の金持ち、カーkland家に居候している普通の青年だった

「アーサーは疲れてるからってからかってもおもしろい反応してくれないしフランスも鏡見てばかりでかまってくれないし……………」

あーもうなんなんだよー!!」

アルフレッドは飲み終えた紙のカップをごみ箱に投げて叫ぶ

紙のカップは見事にごみ箱にINした

「お、さっすが俺なんだぞ!」

アルフレッドはうきうきしながらごみ箱を覗く

「ごみ箱覗いてなにやってるあるか………つたく」

「あ、^{ヤオ}耀じゃないか。なんでここにいるんだい？」

アルフレッドに声をかけたのは黒髪を一つに束ねた童顔の青年、王^{ワシ}耀^{ヤオ}だった

「たまたま通りかかっただけある。でもこの時期にお前が外出なんて珍しいあるな、変なものでも食べたあるか？」

今は冬。アルフレッドは冬がとてつもなく苦手であり冬の時期にはずっと家に引きこもりゲームしたり、寝たり、ゲームしたりと不規則すぎる生活を毎年している

今日だって凍えるような寒さでアルフレッドじゃなくても家に引きこもりたくなるような日だ

「だってゲームも全クリしちゃったしアーサーもフランススもかまってくれないから退屈だったんだぞ」

「じゃあまたゲーム買えばいいんじゃないあるか？」

「お金がないんだぞ」

「はあ！？お前、金持ちの家に居候してんじゃないあるか！金に困る方が難しいある！」

「アーサーはケチだからお金くれないんだぞ。ひどいんだぞ、自分

だけ裕福な人間になりやがって」

「ま、まあいっらしいっちゃあらしいあるな」

耀が困ったように肩をすくめる

そしてやがて何かに気付いたようにアルフレッドを見つめた

「な、なんだい？」

「お前……………今暇あるか？」

耀はやけに真剣な顔で聞いてくる

「え、な」

「ひ・ま・あ・る・か!？」

「えと……………まあ暇っちゃあ暇……………というか退屈なんだぞ。」

アルフレッドに詰め寄った耀はアルフレッドの答えを聞いた途端に表情が明るくなった

「そうあるか!!じゃあ安心ある!」

耀はどこからかカゴを取り出しアルフレッドに渡す

「え、な、なんだい!？」

「今から言う場所にこのカゴに入っている物を届けて欲しいある」

「え？ちょ」

「この街の奥にある森は知ってるあるな？その森に入って左に曲がってしばらく歩いていた右に歩いていてそれから……」

「ああああ！！もう！とりあえず森に入ればわかるんだぞ！じゃ、いつてくるんだぞ！」

「あ、待つある！！その森は……」

しかし耀が呼び止めた時にはアルフレッドの姿はなかった

街の奥にある森は『名もなき森』と呼ばれており入った人は必ず迷うため人々からはさけられていた
そんな森に耀はなんのようだったのだろうかと疑問に思いながらアルフレッドは森を進んでいた

「ていうか耀にどこに行けばいいのか聞くの忘れちゃったんだぞ……」

それは自分が悪いんじゃ……

「うー、めんどくさいけど耀の所に戻って聞いてくるんだぞ……………」

アルフレッドは引き返そうと後ろを向き走った。

「あれ……………」

しばらく走ってから足をとめてアルフレッドは首を傾げた。確かに森に入ってから真っ直ぐに歩いてきたはずなのにどんなに走っても森の入口に辿り着けないのだ
走っても走っても景色はたくさんの木々ばかり

「ど、どうということだい……………？迷わないように真っ直ぐ歩いてきたっていうのに……………」

ぶつぶつ文句を言いながらアルフレッドは森を歩いていく。
そしてアルフレッドの目にある物がうつった

「……………屋敷？」

森にはとても大きい和風な屋敷が建っていた
堀で囲まれたその屋敷の前にアルフレッドは歩いて行く

「なんでこんなところに屋敷があるんだい？」

門の前に立ちアルフレッドは軽く木でできた丈夫そうな扉を押してみた

扉は簡単に音を立てて開き玄関への道が現れた

アルフレッドは興味が湧いてきてそのまま敷地内に足を踏み入れる。

いわゆる不法侵入というやつだ

しかしそんな言葉を知りもしないアルフレッドはワクワクした表情で玄関の戸に手をかける

そこでアルフレッドはふと幼い頃にアーサーに言われたことを思い出す

『いいかアルフレッド。人の家に入るときはな、必ずインターホンを押すかノックをしなきゃいけないんだ』

『なんでだい？そんなのめんどくさいじゃないか』

『めんどくさくてもだ。』

勝手に家にあがりこんだらその家の人に失礼だろ？だから……………」

『なんかよくわかんないからとりあえず失礼じゃないように入ればいいんだね？』

『え、いやそうじゃなくて…………』

『フランシスー、おやつー』

『あ、ちよっ…………』

アルフレッドにとっては別に思い出しても何も得しないことだった

アルフレッドはアーサーが言った正しいことをきれいさっぱり忘れておりアルフレッドは『人の家に勝手に入るときはとりあえず失礼じゃないように』が正しいと思っている

「んじゃ、行くんだぞ！」

アルフレッドは戸を開けた

「ごめんくーださーい！！」

アルフレッドの声が屋敷の中に響き渡り、やがて消えた屋敷からは物音一つせず誰もいないようだった

「なんだ、誰も住んでないのか……………」

アルフレッドはそのまま家に上がり廊下を歩く

誰も住んでいないにしては家の中はきれいだ

「ここの家は俺の住んでる家と作りも見た目も全然違うな……………この前アーサーに聞いた和風スタイル？っていうやつかな？」

アルフレッドの家とは違いほとんどが木でできているため歩くたびに床は軋み、音を出す

ルーカスには様々な国の人が住んでいるため家も様々な種類があるがこういう種類の家は少なく、珍しいアルフレッドも始めて入ったようだ

興味津々でアルフレッドは家の中を見学する。
そしてアルフレッドはふとある物が目に入った

障子で閉じられた部屋だった。

障子を少しだけ開け、中を覗いてみると部屋の中は真っ暗で何も見えない

「なんだいここ………全く日光が入ってないじゃないか………」

そう行つてアルフレッドは部屋の中に入る

障子の隙間から光が入ってくるから部屋の中が見えないこともない

「……………へ？」

アルフレッドは思わず変な声を出してしまった。

部屋の畳の上になんか塊が転がっていた

なんか布団を巻いたような………

「な、なんだいこれ……………」

アルフレッドはしゃがんでその塊にちょん、と触ってみる
塊はぴくつと微かに動いた

「わ、わ！？う、動いた！？布団なのに！？」

アルフレッドはパニックつて部屋を走り回る
そして塊につまづいてコケる

「いたたたた……………なんなんだよこの塊は……………」

「いたた……………こ、腰が……………」

「！！！！？」

アルフレッドは塊がしゃべったのに驚き、後ずさった

理解できない出来事の連続にアルフレッドは目眩がする

そしてさっきまで横たわっていた塊（布団の）が一人でに起き上がったことによりアルフレッドの脳は機能停止一步前になる

「な、な……………」

布団の塊は立ち上がったと同時にぐるぐる巻きだった布団が床に落ちた

塊の中から姿を現したのは……………

「……………は？」

漆黒の髪と瞳を持つ美しい青年だった。

Episode 1 (後書き)

できれば感想をお願いいたします。人（、＊）

Episode 2 (前書き)

短いです

短すぎます

まあそういってあげます

Episode 2

布団から出てきた青年は何も言わずにアルフレッドを見下ろした

「え、な……………？」

青年は腰にさした刀を鞘から抜きゆつくりと口を開いた

「何者だ」

「え、俺は……………」

しゃべりだしたアルフレッドの首に刀が向けられた

「あ……………」

アルフレッドはしゃべるのをやめ青年の顔を見た
青年は綺麗な漆黒な瞳でアルフレッドを見ていた。
光のない、冷たい瞳で

「ち、違うんだ！俺は……………！！」

「質問に答えてください、さもなければ……………」

青年は刀の峰をアルフレッドの首に当てる
冷たい感触がアルフレッドの全身を麻痺させた

「あなたの命はありません」

青年が突き放すように言った後、アルフレッドは目の前が真っ暗になった

「ん……………」

アルフレッドは目を覚ました。
どうやらあの時気絶してしまったらしい

「………」

「あ、おはようございます」

アルフレッドが寝ていた部屋の襖が開きある人物が現れた

それはさっきの青年だった

「あ、え、その……………」

「先程は申し訳ございません。知らない方だったので……………」

青年はさつきとは別人のように礼儀正しくアルフレッドに謝る

「いや、俺も勝手に入っちゃったし……………」

まあもとともと悪いのはアルフレッドだ。

だからアルフレッドも謝る

「問い詰めたらいきなり気絶するので驚きました……………何者かもわからないのに殺すかどうかと迷っていた所、あなたがこれを持っているのに気付きまして……………」

そう言いながら青年は先程、耀に渡されたカゴだった

「それは耀に渡された……………」

「やはり耀さんの知り合いでしたか、これがなかったら罪のない人を殺めてしまっていました……………」

青年は安堵したように息を吐いた

アルフレッドも青年が優しい人だと気付き安心した

「君は耀とどんな関係なんだい？」

「そう、ですね……………古い知り合いとでも言うておきましょうか」

「そのカゴの中身は？」

「ああ、食材です。耀さんがいつも持ってきてくださるんです」

そう言い青年は静かに笑う

青年は見た目は自分より年下に見えるがとても大人びている
とても一緒にいて落ち着いた

「あ、俺アルフレッド・F・ジョーンズって言うんだぞ!」

「アルフレッドさんですか……………いい名前ですね」

青年はまた笑った

「君はなんていうんだい？」

「私、ですか？」

アルフレッドは青年の目つきがいきなり変わった気がした
なんか今自分が言った言葉をずっと待っていたような……………

そしと青年は立ち上がって言った

「私の名前は本田菊と申します。職業は……………探偵です!」

「……………は?」

アルフレッドはしばらく何も言えなかった

Episode 3

俺は菊の自己紹介を聞いた後、耳を疑った

い、今何て？

探偵？

Why？

「まあ普通戸惑いますよね……………」

菊は苦笑しながらまた座った

俺、探偵初めて見たんだぞ…………

「珍しいですね、探偵なんて」

まるで俺の心を覗き込んだように俺が思ったことを菊は呟く

「だって探偵って警察と一緒にいたいなもんだし、あと」

「こんな平和な街に探偵や警察がいたって何の意味もない、と言いたいんですね」

ま、また心読まれた…………

超能力者か何なのかい？

「まあその通りですね。この街にはまったく起こりませんよね。」

ずっと笑顔で話していた菊の顔が変わったのはここからだっ

「そう、目立った事件は……………」

「え？」

俺は聞き返してしまった。

言葉の意味が理解できなかったからだ

しかし菊はそのまましゃべり続ける

「アルフレッドさんは自分の街のこと、よく知っていますか？」

「え、いや」

そういえば街のことはよく知らない。知ろつともしていない

「ですよ。でも……………」

菊は目を細めて、小さい声で呟いた。小さい声でも近くにいた俺にはしっかり聞こえた

「知らない方がいいかもしれませんね……………」

菊はこう言った。
悲しそうに。

「菊……………」

菊の顔を見る。菊の顔はさっき俺に刀を向けた時と同じ顔だった。

光りのない闇に染まった瞳、感情がないようにまったく動かない表情。

俺はなんというか……………この菊は苦手だ。理由はよくわかんないけどなんか嫌だ

さっきまでの菊に戻ってほしい、俺は口には出さずにずっと心の中でその言葉を何回も繰り返した

その声が菊に届いたのか菊は笑顔に戻り

「お茶入れてきますね」

と、部屋を出て行った

菊が出て行った後、俺は体中の酸素を吐き出し布団に倒れ込んだ
ああいう状況は苦手だ、それは小さいころからそうだった

小さい時にアーサーとフランスが当時の俺には理解できない真面目な話をしている時だってなんか落ち着かなかったし

そんなことを思い出していると菊がお茶を持って戻ってきた

「おー、このお茶始めてみるんだぞ」

「これは緑茶と行って私の国で飲まれている飲み物です」

「いったきまーす！」

喉が乾いていた俺は緑茶というお茶を一気に飲む

「あ、でもそれ苦いんです」

「ぶふうふうふうふうっ!!」

「……………」

俺は緑茶のあまりの苦さに吹いてしまった

菊は笑顔のまま固まっている。

「まあ、やるとは思いましたが……………ここまで盛大に吹くとは……………」

「う、ごめん！でも本当に苦くて……………」

あの飲んだ瞬間に口の中に広がったとてつもない苦みは一生忘れない自信があるんだぞ！

「でも健康にいいですよ、緑茶」

「いやいやいや！！そんなの飲んでたらいつか死ぬよ！？吐くよ！？」

「あなたは吹きましたけどね」

菊は冷めた表情で部屋に飛び散ったお茶を見る。
うわ絶対気にしてるよどうしよう

「この緑茶、みなさんが苦いといって飲まないため私が改良して飲みやすくしたんですが……」

「どこがだい！？もとより10倍くらいになってるんじゃないかい！？」

「そうですか？」

菊は首を傾げて、自分の分の緑茶を飲んだ
ちなみに俺は緑茶を飲んでから0.5秒で吹いた
軽く自慢だ

「私はちょうどいいですけど………」

「君の舌おかしいよ！」

菊はいきなり俺を見てくすくすと笑った

「な、なんだい？」

「いえ………こんなに楽しく会話するの久しぶりで………」

「久しぶり？」

「ええ、最近ずっと人と会ってなかったのだから」

ずっと？

それってどのくらい……

菊はそれで寂しくなかったのかな？

「あ、もうこんな時間ですね。」

菊が外を見て言った。

外はもう真っ暗になっていた

「え！？もうこんなに暗く……………」

俺がこの家に来たのは確か午前くらいだったのに…………

「アルフレッドさん、ずっと気絶されていましたので……………」

「ど、どのくらい？」

「5時間くらいですかね？」

「そ、そんなに！？」

部屋にある時計を見るともう9時だ。

やばい！アーサーに怒られる！

「途中まで送ります。もう夜ですし森に迷わないように……………」

「あ、ありがとう！」

「いえ」

菊は棒みたいな物を腰にさした

家を出るとただでさえ夜は暗いのに森の木々のせいで辺りは真っ暗で何も見えない状態だった。

「うーわ、真っ暗だ。ライトか何かを……」

「ダメです」

「え？なんで」

「光があると私達の居場所がわかってしまいます」

菊は森を眺めている

「な、誰に？」

俺は菊の言ってることがよくわからず菊に問い掛けた。
菊は俺の質問に答えずに俺の手を握った

「え、何……」

「走りますよ」

菊が腰の棒から何かを抜いた
それは鋭い刃がついた刀だった

「絶対に私の手を離さないでください」

「ちよっ……………！！？」

俺の返事を聞かずに菊は走りはじめた

まあ手を握られてるから俺も走らなきゃいけないんだが

真っ暗で何も見えないが周りの景色が流れていくのを俺は体で感じ
ていた

菊はスピードを落とすことなく全速力で走り続ける

俺もそれに一生懸命ついていく

体に冷たい冬の風が当たって痛い

「き、菊！どこまで………とわあっ！！」

菊は急にスピードを落として止まった

しかし俺は止まれなくてそのまま転んだ

「だ、大丈夫ですか？」

菊が差し延べた手をとって俺は立ち上がる

枯れ葉がクッションになってくれて怪我しなかったが転んだらそり
やあ痛い

「いたた……も、もういいのかい？」

「はい、もう出口なので」

「で、出口？もう？」

確かに目の前には街の風景が広がっていた。

この森は山の上だから街の夜景がとても堪能できる

「あ、ありがとう。来るとき迷ったから」

「いえ。もしよければまたいらしてください」

「いいのかい!？」

「はい、いつでも」

俺は森から出た。

でも菊は一步も森から外に出ようとしない

でも俺はそんなこと気にしないで菊に手を振り山を降りていった

「また来る、ですか……でも……」

菊は空を見上げる

「いつかは………私のもとからいなくなってしまうのでしょうか?」

そついう菊の瞳はとても悲しそうだった

Episode 3 (後書き)

感想お願いします!!

Episode 4 (前書き)

私は文章を書くのが本当に下手すぎるぜ

Episode 4

「た、ただいま……………」

俺は大きな玄関を少しだけ開け中を覗き込んだ
中は真っ暗だった。

アーサーとフランスはもう寝たらしい。

アーサーに絶対怒られるかと思ってたからアーサーが寝てることに
気づき俺は安心した

なるべく音を立てないように中に入り忍び足でリビングに向かう

リビングにつき上着を脱ぎ捨てソファーに倒れ込む

「ああー怒鳴られるかと思ってたから……………よかったんだぞー」

俺はため息をつく

「ったくアーサーはいつもいつもガミガミうるさいんだよ……………
クソ眉毛が……………」

「だあれがクソ眉毛だってえ??」

「!!!!!!?」

真っ暗だった部屋が突然明るくなり聞き覚えのある声が聞こえた。

「ア、アーサー……」

リビングの入口に立っていたのはボサボサの金髪にエメラルドグリーン
の瞳を持つこの家の主、アーサー・カーランドだった
母と父が早くに亡くなり、若くしてこのカーランド家の当主とな
った男だ。

人がいいのか一人が寂しいのかこの家に俺とフランシスを居候させ
てくれている。

「今何時だと思ってんだ!!どこ行ってた!!」

「だ、だって……」

「ちゃんと言え!!」

アーサーに怒鳴られ仕方なく今日あったことを話す

「さ、散歩してたら耀に会って……頼み事されたから街の奥の
森に行ったんだ」

「おまつ……『名もなき森』に行ったのか!？」

「え、うん」

街の奥の森、と俺がその言葉を口した途端アーサーの表情が変わっ
た。何かあるのだろうか？

「迷っただろ？」

「んー、まあね。で困ってたら和風スタイルな大きい屋敷を見つけたから中に入ったんだ」

「屋……敷……」

「で中で本田菊って人と知り合ったんだ。友達になったんだぞ!!」

「き……く……?」

菊の名前を聞いた途端アーサーは目を見開いた

「お前っ……菊に会ったのか!!!?」

アーサーが声を大きくして俺に聞いてくる

「う、うん……アーサー知り合いなのかい?」

「っ……」

アーサーは顔を歪め、そっぽを向いた

「いや……別に……」

「?そうか」

さっきからアーサーの様子がおかしい俺、なんか変なこと言ってたかな?

「おいおいお前達、夜に大きな声出すなっつの」

「フランスス！？お前起きてたのか！？」

「あんな大きな声で話してたら起きるって。近所迷惑だぞ」

肩をすくめながらリビングに入ってきたのはこの家の居候その2のフランスス・ボヌフォワだ。

ウェーブがかった金髪、青い瞳に顎に髭をはやしたぶっちゃけ言う
とナルシストな奴なんだぞ。

ちなみにアーサーとは仲がめちゃくちゃ悪いんだぞ

「何そんなに言い争ってるわけ？お兄さんにも聞かせて？」

「言い争ってなんかねえよ……………」

チツ、とアーサーは短く舌打ちをして俺の方を見た。

「アルフレッド、お前はもう寝ろ」

「え、なんで」

「子供は早く寝ろ、ってことだ」

「なんだとおっ！！？俺だってもう19歳なんだぞ！？子供扱いしないでくれよ！！」

「まあまあ明日朝起きるのつらくなるんだから寝とけ寝とけ」

フランススに背中をおされ俺はリビングを追い出された

「な、なんなんだよ二人とも……………」

俺は仕方なく2階にあがっていった

「行っ たみたいだね」

「そうだな」

フランスはアルフレッドが2階にあがったことを確認するとアーサーの顔を見た

「で、どんな話してたの？」

「アルフレッドが……………今日『名もなき森』に行ったらしい」

「『名もなき森』にか……………！？」

「ああ、それで……………」

アーサーは下を向いて言った

「菊に……………本田菊に会ったそうだ」

アーサーが口にした意外な人物の名にフランシスは声を大きくして聞き返す

「きつ……………菊に!!?」

「静かにしろ!!アルフレッドに聞こえるだろ!」

アーサーはフランシスの口をふさぐ

「わ、悪い……………でもアルフレッドが菊に……………」

「ああ、菊の家は森の特殊な空間の中にある。その中に入れるのは一部の人間だけだ」

「でもアルフレッドは菊の家を見つけだした……………。これは偶然なのか?」

アーサーは目を閉じる。

「偶然……………だといけどな……………」

「うー、なんか眠れないんだぞ……………」

俺は部屋の電気をつけずにベッドに寝っ転がっていた。
夜中なのにまったく眠くない

「……………ちょっと外の空気を吸ってくるんだぞ」

そう呟いて俺は部屋を出た

一階に降りたらリビングの電気がまだついていていた。アーサーとフラ
ンシスはまだ起きているらしい

二人に気付かれないように廊下を歩いて玄関の扉を開けた

「寒っ！！マフラーとかしてくればよかったかな……………」

外は上着だけでは寒さを十分に防げないくらい寒かった。
夜中だからな……………

「うーん、暇だからぶらぶらしてみよう」

俺は道を歩き出した。

真夜中だし誰もいないから辺りはとても静かだ
街灯の明かりが真っ暗な道を照らしてくれている

「明日また菊ん家に行こっかな、なんか食べ物とか持って行って…
……………」

「だ、誰かあああああ！！助けてくれええええ！」

「！！！！？」

突然、遠くから男の叫び声が聞こえてきた

アルフレッドはそれに気付き声の主を探すために走り出す

「な、なんだいこんな真夜中に！！酔っ払いかな！？」

とか言いながらも俺は暗い道を全速力で走る

その時、視界のすみで何かが動いているのに気付いた。

人だ。

たぶん、さっきの叫び声の男だろう。

男は俺には気付かず、道を転びそうになりながらも必死に走っている

「君！ちょっと待ってくれよ！！真夜中にあんな叫び声あげて……近所迷惑なのがわからないのかい！？」

まあ自分もそうなのはわかっていて、大声で男に声をかけた。
しかし男は気付かずに走り続ける

「ちょっと君……………っ」

その時、風が吹いた。

自然の風じゃない、誰かが俺の隣を通り過ぎていったのだ。
はやすぎて姿は確認できなかったがそいつはあの男を追ってるのだ
ろう。

なんのために？

俺はわけもわからないままそいつらの後を追った

やがて男は街の真ん中の噴水広場で止まった。
この噴水広場は家に囲まれていて太陽があまり当たらない場所だが
今は月明かりが照らしていて明るくなっている

「っはぁ……………はぁ……………」

男がやっと止まってくれたので俺は男に近づこうと家と家の隙間か
ら広場に一步足を踏み入れた

「君、大丈夫かい？何が……………」

その先の言葉は言えなかった。
突然、俺の前に誰かが上から落ちてきたのだ。落ちてきたっていう

が見事に着地していたが。

俺は驚きのあまり声が出せない。

さっき俺の隣を通り過ぎていった奴にちがいない。

奴は白い着物を着ていて頭にもなんか白くフサフサしたものをつけていた

顔も確認したかったが奴は俺に背を向けていて見えない。

俺は家と家の間の狭い通りに戻り、身を隠した

「う、うわあああああつ！！？」

男が奴に気付き叫び声をあげる

逃げようとしたがあせっていたのか男は足をからませ転んでしまった。

奴は何も言わずに男にゆっくりと近づいていく。

「や、やめろ。来るな」

男が座ったまま震える声で奴に言う。

それでも奴は男に近づくのをやめない

とてつもなく嫌な予感がした。

俺は男を助けようとしたがなぜだか足が動かない

「ど、どうか命だけは……………」

命？

何を言ってるんだ…………？

殺されるわけじゃあるまいし……………

そう疑問に思った後、俺は自分が思ったことをもう一度思い返す

殺される？

つまり……………

死ぬ？

額に冷たい汗が流れた。

やばい、助けなきゃ

そう思っているのに体は動いてくれない

首すらも動いてくれないから俺はその二人から目が離せない

男の前に奴がやって来た

男は恐怖で顔がすごいことになってる。不謹慎だが少し笑ってしまった

奴は何かを手に持った。

刀だ。

俺は寒気がした。

本当にやばい、あいつ、殺される

奴は刀をふりかざす。
男は目を見開く。

そして奴は、

刀を男に振り下ろした

男の悲痛な叫び声が気持ち悪いくらいに響き渡る。
真っ赤な液体が広場に飛び散る。

俺は声が出せなかった

初めて見る光景に何も感じられなかった。

この気持ちはなんなのだろう

何も言えずにいる俺に赤い液体を浴びた奴は振り向いた

奴は変なお面を顔につけていた。

白かったはずの着物などには赤い模様が出来ていた

月明かりに照らされたあいつはまるで

鬼だった

Episode 5

俺は暗闇の中にいた。

光も何もないのに自分の姿ははっきりと見える。

ここは……どこなのだろう

「誰かー！いないのかーい！？」

大声で読んだが返事はない。誰もいないようだ

「うーん、なんなんだここ……………？」

「……………ル……ッド」

その時、微かに小さな声が俺の耳に届いた

「……………アルフレッド……………！」

その声は自分の名前を呼んでいた。

そしてその声は聞いたことがあった

「アーサー？」

それは俺が居候している家の主、アーサーの声だった。

「アルフレッド！..」

「アーサー？ど、どこにいるんだい！？」

「アルフレッド！」

声はするのに姿は見えない。

あっちも俺の声には気づいてないようだ

「.....っ！起きろって.....」

アーサーの声が大きくなった瞬間、暗い空間に小さな光が現れた。
その光はどんどん大きくなっていく

「言ってんだろおおおおおがああああ！！..」

アーサーの怒鳴り声と共に辺りは光に包まれ、俺もその光に飲み込まれた。

頭に激しい痛みを感じ、俺は目を開けた

「いっつつう.....な、なんだいこの痛みは.....」

「起きたかメタボ野郎」

「げ、アーサー」

「お前俺を見る度に最初に『げ』って言うのやめろ」

体を起こすとアーサーが不機嫌そうに俺のベッドの近くに座っていた

「なんで俺の部屋にいるんだい？勝手に部屋に入るなっていつも言ってるじゃないか」

「こんのバカが……！」

いきなりアーサーに頭殴られた。

「何するんだい！？バカになったらどうするつもりだい……！」

「もともとバカだから大丈夫だろうが！」

「なんだとおっ……！」

「それより……お前なんであんな時間に外に出た！」

「……………え？」

アーサーに聞かれて俺は昨日のことを思い出す

確かに外に出たな……

「いや眠れなかったから……………で、それがどうしたんだい？」

「な、お前……なんも覚えてないのか？」

アーサーは驚いている。

俺……昨日何してたっけ？

「お前……噴水の広場で気絶してたんだぞ？」

「き、気絶……!？」

気絶したのなんて初めてなんだぞ！あ、昨日菊の家で気絶したか。ということは昨日で合計二回気絶したってことかい！？俺大丈夫かな！？

「お前表情変わりすぎだぞ……」

「え、変わってたかい!？」

「ああ、びつくりした顔になったり納得した顔になったりまたびつくりした顔になって最後には絶望的なムンクの叫びみたいな表情になってたぞ」

「……………そ、そうなんだ……………」

自分でもびつくりだよ。

「昨日、フランスと話が終わった後にお前の部屋に行ったら誰もいなくてな。玄関にもお前の靴もなかったし外に出たら家の門も開いてたからお前が外に出掛けやがったのだと思ってな。連れ戻して説教するために探しに行ったんだ」

せ、説教…………

気絶しててよかった……

「で、噴水の広場でお前がのびてるのを見つけたってわけだ」

「噴水の広場……………」

昨日、噴水の広場で何が……………

確か家を出た後…………

叫び声が聞こえて、それでその叫び声をあげた男の後を追って……………
それで噴水広場に行ったんだ！

で、噴水広場に着いた後におかしな奴が現れて男を……………

俺はそこで昨日あったこと全てを思い出した。
頭の中が真っ白になる

「……………昨日何があった」

アーサーは俺の様子に気付いて聞いてくる。
アーサーに話そうとしたがなんかコイツは信じてくれなさそうだな

……

「な、なんもなかったんだぞ！寒すぎて倒れちゃったただだよ！」

俺は必死にごまかす。

「はあ？何もないわけないだろ。お前、顔真っ青だぞ」

マジかよ

「ほ、ホントなんだぞ！顔が青いのはちょっと具合が悪いからで……」

「元気だろ、お前」

アーサーに冷たく言われる。まあその通りなんだけど……

俺が何も返せずにいるとアーサーはため息をついて、

「もういい。今日は休んでろ」

と言って部屋を出て行った。

アーサーが部屋を出ていくと俺はベッドに寝っ転がった。

「うー、アーサー言ったって信じてくれるわけじゃないじゃないか。」

アーサーの悪口を言った後、布団の中に潜りこんでため息をついた

「昨日のこと……誰かに話した方がいいのかな……人が一人、死んでるわけだし……」

でも警察なんかが信じてくれるわけない。知り合いにも信じてもらえなさそうだ。

呆れていると頭の中にある人物のことを思い出した。

「そうだ……菊に話そう!!」

菊なら信じてくれるはず。

そんな希望を持って俺はジャケットを羽織り、家を出た。

「お、アルフレッドじゃねーあるか」

喉が渴いたから自販機でジュースでも買おうと公園に行ったら耀ヤオがベンチに座っていた。

「耀じゃないか。よくこんな寒い中外出できるね」

「その言葉、そっくりそのままお前に返すあるよ」

自販機にコインを入れてコーラのボタンを押す。
ガタガタッ、と音をたてながらコーラの入った缶が取り出し口に落ちてきた。

「どこに行くつもりあるか」

耀も自販機でペットボトルのお茶を買いベンチに座ってペットボトルのキャップを開けながら聞いてきた。
俺も缶のプルタブを持ち上げた。

「んー？ああ、菊の家だよ」

そう言った途端、お茶を飲む耀の手が止まった。
そして驚いた顔で俺を見た。

「おまつ、菊に会ったあるか！？」

「え……………だって君が昨日、菊に届ける物を代わりに持ってけって俺に頼んできたから……………」

「そ、そういえばそうだったある……………」

耀はお茶をがぶ飲みした。

みんななんで俺が菊の話をするとう驚いたりすんだろっ？

「まさか本当に菊に会うなんて……………」

耀がボソツと小声で何かを言った。

「何か言ったかい？」

よく聞こえなかったから耀に聞き返した。

「なんでもねーある。早く菊のそこに行くよろし」

耀はそれだけ言つとそっぽを向いてしまった。

追いかけようと思ったがめんどくさかったからやめてそのまま森へと歩いていった。

アルフレッドが公園を出ていくのを耀はずっと浮かない顔で見っていた。

「アルフレッド・F・ジョーンズ……………」

耀はアルフレッドの名を口にして静かに笑った

「やっぱりおもしろい奴ある」

やがて俺は森の入口に着いた。

入口で立ち止まり、森の中を覗きこむと昼にもかかわらずたくさんの木々のせいで太陽が隠れてしまい中は暗くて不気味だった。

「うわ……………暗いんだぞ……………」

暗いのがちよつと苦手な俺は顔を青くする。よく昨日普通に入つてこれたな、と昨日の自分自身に一番驚いている。

「で、でも菊と話もしたいし……………しょうがない……………行くか……………」

そうため息をついてアルフレッドは森の中にゆっくりと入っていった。

Episode 6

「うーん……………」

森に入ってしばらく歩いた後、アルフレッドは立ち止まり唸る。

「迷ったんだぞ……………」

アルフレッドは周りを見渡す。

菊の家はどこにも見当たらない。

「このまえと同じ道で来てるんだけど……………」

顎に手を当ててアルフレッドは首を傾げる。

「あろう……………」

「つえ!!!??」

突然、後ろから誰かに声をかけられアルフレッドはとびあがる

後ろを振り返ると髪が長い着物を着た少女がアルフレッドを見ていた。

「すみません。私、ある人を探しているのですが……………。どこにいますか?」

少女は控えめにアルフレッドに問い掛けた。

「人？こんな所に？」

「はい」

一瞬、菊のことかと思ったが菊はあまり外に出なさそうし、人とあまり関わらなそうだから違うと思った。

「どんな人だい？」

「えっと……………漆黒の髪と瞳を持つ……………」

「漆黒の……………髪と瞳？それって……………」漆黒の髪と瞳、それは明らかに菊の特徴と一致している。

「知って、いるのですね？」

アルフレッドの言葉を聞き、少女はいきなりアルフレッドの手を掴んだ。

アルフレッドは驚き、逃げようとするが少女の手を掴む力は強く逃げられなかった。

「な……………」

「その人の名前、今すぐ教えてくれませんか？」

手を掴む力は一層強くなり、アルフレッドは顔を歪める。

その時、強い風がふいて森の木々がザワザワと揺れた。

「ちっ……………」

少女は悔しそうな顔するとアルフレッドの手を乱暴に離し、森の奥へと消えていった

「??？」

アルフレッドは状況が掴めず、混乱している。

「アルフレッドさん？」

背後から優しく、落ち着いた声が聞こえてきてアルフレッドは振り返った。

「菊!-!」

背後にいたのは着物を着て落ち着いた表情の菊だった。

「どうかしましたか? 顔色が悪いようですが……………」

菊は心配そうにアルフレッドに話しかけた。

「え！？いや、別に俺は元気だよ！」

アルフレッドは掴まれていた手を背中に隠し、無理に笑った。

「そうですか…………。あ、おいしいお茶菓子があるのですが……………私の家に来ますか？」

「お茶菓子！？それってお菓子かい！？」

「はい。では行きましょうか」

アルフレッドは菊の後ろをついていった。

「うーんお茶菓子、っていうのもおいしいんだぞ！」

「お気にめされてよかったです。いっぱいありますので家に持ち帰っても大丈夫ですよ」

菊はお茶をすすりながら笑った。

「そういえば……………アルフレッドさんは、昨日夜中に外を出ま

したよね?」

「え?」

菊の言葉を聞いてアルフレッドは菊を見た。

いつもと違い少し思い詰めたような顔になっている。

「ん……………まあ……………出たっちゃあ出たんだぞ……………」

「そうですか」

菊はまたお茶をすする。

アルフレッドもお茶をすする。そして嘔く。

「……………」

菊は無言で盛大に嘔かれ、壁や床についたお茶を冷やややかな目で見つめている。

「あ……………えと、S o r r y……………」

「いや、大丈夫です。お茶を出した私が悪いんです」

そう言いながら笑顔でお茶をふく菊の目は笑っていない。

アルフレッドはもし次こんなことをやったらとんでもないことになると寒気を感じた。

お茶をふきおわった菊にアルフレッドはふと気になったことを聞いてみる。

「もしかして君も昨日夜中に外に出てたのかい？」

「……………」

菊は黙り込んだ。

アルフレッドはまたお茶を飲もうとしたがさっきやったことを思い出してお茶をテーブルに置く。

「いえ、出ていませんよ」

「え、じゃあなんで俺が外に出たって……………」

「勘ですよ」

菊はお茶菓子をつまんで食べる。

アルフレッドはもし菊が外に出ていたらあのことを知ってるかと聞こうとしていた。

しかしアルフレッドは菊にそのことを聞くのをやめた。

なぜか……………菊には聞いてはいけない気がした

Episode 7

お茶菓子を食べた後、アルフレッドは菊の家を観察していた。

「それにしても不思議な造りだね。菊の家は」

アルフレッドが呟くと縁側でお茶を飲んでいた菊は振り返る。

「私の先祖が住んでいた国はこういう家に住んでいたんですよ。ルーカスには私と同じ民族の方はあまり住んでおりませんのでアルフレッドさんにとっては珍しいですよね」

「菊の先祖が住んでいた国ってなんだい？」

「日本という四季が美しい東洋の島国ですよ。今実在しているのかは不明ですが……」

菊は立ち上がって部屋を出て行った。

やがて帰ってきた菊は一冊の本を持っていた。

「なんだい？その本」

座敷に座り本を開いた菊の隣に座り、アルフレッドは本を覗きこむ。

「昔の世界の国々についての本ですよ。今はもうない国についても書かれているんですよ」

「へえ！！日本っていうのはどこだい！？」

「ここですよ」

菊が指差した所を見ると、そこには海に囲まれた不思議な形のした陸地が描かれていた。

「随分と不思議な形のした国だね！」

「島国ですからね。同じ国でも陸地が離れているんです」

確かに同じ国でも陸地が所々離れていた。

「おもしろいね！俺の先祖の住んでいた国はどこだい！？」

「アルフレッドさんの先祖が住んでいた国はどこですか？」

菊に聞かれてアルフレッドは固まる。

「……………え、まさか……………」

「……………知らないんだぞ」

アルフレッドは小さく言った。

菊はかなり驚いている。

「え、親とかに聞いたことないんですか？」

菊が聞いた途端、アルフレッドは少し悲しそうな顔をした。

「俺……………親いないんだ……………」

「え……………？」

菊は言葉を失う。

「いや、俺はよく覚えてないんだけど……………物心ついたときにはもうアーサーの家に住んでたんだ」

アルフレッドは悲しそうに菊に自分のことについて話す。

「そう……………ですか……………」

菊はアルフレッドの話を聞いて静かに言った。

「すみません、失礼なことをお聞きして……………」

「ん？いや、別に俺そういうことは気にしないタイプなんだ！」

アルフレッドはさっきとまったく違う様子でいつもみたいに笑った。

菊はそんなアルフレッドの様子を見て微笑んだ。

Episode 8

「んー、で俺の先祖が住んでた国は一体どこなんだよー……」

アルフレッドはどこから持ってきたのかシェイクを飲みながら言った。

「私の勘ですが……………」

菊は日本が描かれていたページをめくり次のページに描かれている日本と比べて大きい大陸を指差した。

「U・S・A? 不思議な名前だね」

「これはアメリカというんです。」

「アメリカ?」

アルフレッドは首を傾げた。

「当時、世界でとても有名だった国ですよ。この国に住んでいる方々は金髪の人や瞳が青の人が多いんです。」

「ま、まるで俺じゃないか!」

アルフレッドは金髪に青い瞳を持っている。

アメリカに住んでいた民族の特徴と一致している。

「じゃあ俺の先祖はアメリカに住んでいたんだね！俺と同じBIG
な国でよかったよ！！」

「いえ、まだアメリカと決まったわけではないので……」

菊は苦笑する。

「それに、このアメリカが世界で1番大きいというわけではないん
です」

「え？」

菊の言葉にアルフレッドは耳を疑う。

菊はページをめくり続け、あるページで手をとめた。

「これは……！！」

アルフレッドはそのページを見て驚く。

そのページいつぱいに描かれた国。
さつき見たアメリカの何倍もある。

「で、でかすぎるんだぞ！！なんだいここ！！」

「ロシアという国ですよ。当時、世界一の国土面積を持っていた国
です」

「す、すごいんだぞ……。ルーカスには先祖がロシアに住んでいた人はいろのかい？」

「ルーカスは広いですから探せば必ずいると思われますよ」

菊は本を閉じた。

「よければ差し上げますよ、この本」

「え、いいのかい！？」

アルフレッドは目を輝かせる。

「はい。まだこういった本はたくさんありますのでそれは差し上げますよ」

菊は笑顔で本をアルフレッドに手渡した。

アルフレッドも笑顔で本を受け取る。

「Thank you！大事にするんだぞ！！」

アルフレッドは本を胸に抱きしめた。

「あ、そろそろ帰らなきゃ……………」

アルフレッドが時計を見て言う。
もう時計は6時を指していた。

「お帰りですか？送っていきますよ」

「いいのかい？じゃあよろしくなんだぞー！」

アルフレッドは立ち上がって玄関へと走っていった。

外に出ると風が強くふいていて木々がザワザワと揺れていた。

「風、強いね……………」

ぴよんとはねたアホ毛を揺らしながらアルフレッドが呟く。

「そうですね……………あと空模様も怪しいですし……………早めに帰りましょうか」

菊とアルフレッドは屋敷の門を出た。

菊はゆっくりと森の道を歩いている。アルフレッドも菊の後ろについていく。

「今日は全速力で走らなくていいのかい？」

今日は昨日と比べてやけにゆっくりだからアルフレッドは菊に聞いてみた。

「はい、今日は……………」

アルフレッドの問いに答えようとした菊の足が止まった。
アルフレッドも足を止める。

「ど、どうしたんだい？」

「しっ！静かに」

菊に言われアルフレッドは黙る。

菊は背中に背負っていた布から刀を取り出し鞘から抜く。

クスクス……………

風に乗って気味の悪い笑い声が聞こえて来る。

クスクス……………

「な、なん……………だい……………この笑い声……………」

笑い声は途切れることなくずっと聞こえてくる。

「アルフレッドさんについてきたようですね」

菊は空中を睨む。

「ついてくる？ な、何がだい？ まさかゆゆゆ幽霊！ ！？」

アルフレッドは顔を青くする。

「まあそんなものです」

ケロッと言う菊。

アルフレッドは危うく意識を手放しそうになった。

クスクス……………

笑い声はだんだん大きくなっていく。

アルフレッドは耳を塞いだ。しかし笑い声はアルフレッドの指の間を
通ってアルフレッドの耳に届く。

「アルフレッドさん、私の家に戻りますよ」

菊はアルフレッドの手をとった。

『逃がさないわよ』

突然、女らしき者の声が森に響き渡り菊とアルフレッドの周りに人……いや、わけのわからない生物が現れた。

「ひっ！！？ななななんだいこいつらあああ！！」

アルフレッドが生物を見て叫び声をあげる。

生物は形は人間だが、皮膚は剥がれといて全身が赤く目を光らせていた。

「数は少ないですね……。アルフレッドさん、そこから動かないでくださいね」

菊は刀を構えて生物を見渡す。

ザワザワ、と木々が風で揺れた時、生物は一気に菊に襲い掛かってきた。

一瞬の出来事だった。

菊は襲い掛かって来た生物を次々と刀で斬り、1分もしないうちに立っているのは菊とアルフレッドだけとなっていた。

アルフレッドは予想外の出来事にしばらく声が出せないでいた。

ずっと前を見ていた菊がアルフレッドがいる後ろを振り返った。

菊の着物は生物の血で所々赤い染みをつくっていた。しかし菊は表情を変えずに刀についた血をはらって鞘におさめ、立ち上がれずにいるアルフレッドに手を差し延べた。

「大丈夫ですか？一回、私の家に戻りましょうか」

「う、うん………」

心臓がまだバクバクしていて状況が理解できないアルフレッドは菊の手をとって立ち上がった。

菊の家に帰り、アルフレッドは座敷でくつろいでいた。

しばらくして別の部屋に行っていた菊が戻ってきた。

「申し訳ありません、アルフレッドさん。今日は危険ですので私の家に泊まっていてください」

菊は申し訳なさそうにアルフレッドに言った。

「わかったんだぞ！じゃあアーサーに電話しないと……………」

アルフレッドは携帯を取り出して自分の家に電話をかけた。

『はいもしもし、どなたですか？』

電話をかけてすぐにけだるそうな声の家の主が電話に出た。

「あ、もしもしアーサーかい？」

『な、アルフレッド！？お前どこに……………』

さっきのけだるそうな声と違い、突然アーサーは声を大きくしてきた。

「えと…………今、昨日話した菊ん家にいるんだぞ。で、なんだかんだで菊ん家に泊まるんだぞ」

『はあ！？なんだかんだってなんだよ！』

「なんだかんだはなんだかんだなんだぞ」

『意味わかんねえよ！』

電話の向こうではアーサーはかなり興奮しているようだ。こうなったらいろいろめんどくさいからアルフレッドはさっさと電話をきる

うとした。

「あー、もうきつていいかい？」

『大体今日は俺が夕食のデザートにスコーンを作ってたのに……』

マジで今日帰れなくてよかった。

アルフレッドは心の中でガッツポーズをした。

アーサーはブツブツと何かを言っている。きりたいけどきいたら後でガミガミ言われるからきれない。

『あー、アルフレッド？』

突然、アーサーの声がフランシスの声に変わったのでアルフレッドは驚いて携帯を落としそうになった。

「フ、フランシス！？」

『ごめんなー。アーサー、今酔っ払っててw』

「酔っ払って……？」

アルフレッドは時計を見る。

時計は7時をさしていてまだ酔っ払うには早い時間だ。

「だ、大丈夫なのかい？」

『んー？お兄さんもう慣れてるから大丈夫だよー』

フランシスは陽気に答える。

『菊ん家に泊まるらしいね、楽しんで来てねー』

さっきまでのアルフレッドとアーサーの会話を聞いていたのかフランシスは状況を把握していた。

「あ、うん！」

『で、ちょっと菊にかわってくれない？』

「菊に？うん、わかったんだぞ！」

フランシスに言われアルフレッドは台所で夕食の準備をしている菊の元に走っていった。

「おや？アルフレッドさん、どうかなさいましたか？」

台所の入口に立っているアルフレッドに気付き割烹着姿の菊は声をかける。

「フランシスが菊に変われ、って……………」

「フランシスさん？」

「あ、俺とアーサーと一緒に住んでる奴なんだぞ」

「そうですね……わかりました。少しお話をさせていただきますのでアルフレッドさんは鍋を見ててください」

「了解なんだぞ！」

アルフレッドは手を挙げて元気よく答えた。

そんなアルフレッドを見て菊は笑うとアルフレッドの携帯を片手に屋敷の庭に出た。

「もしもし、お電話変わりました」

携帯電話を耳に当て、菊はいつもと同じように静かに言った。

『おー！まじで菊じゃん！！やっほー！！』

「こんばんは、フランスさん」

電話の向こうでフランスがかなり喜んでいるのは菊にもわかった。

『今日はアルフレッドがお世話になるねー。うるさい奴だけど大丈夫？』

「賑やかで楽しいので全然大丈夫ですよ」

菊は微笑みを浮かべた。

Episode 9 (前書き)

私は文章を書く力が本当に欲しいです……

なんだこのグダグダ感。

今回は世界のお兄さんと菊がひたすら話まくるというお話。

Episode 9

『それにしてもお前、十年くらい前からずっと引きこもってたよな？何してたんだ？』

「たまっていたアニメを見たり同人誌などを……………」

『あ、うん、もうそれ以上はいいや……………』

「そうですか？」

語り始めた菊をフランシスがとめる。
なんかすごく長くなりそうだったからだ。

『まあそついう理由もあるけど……………ほかにもあるんだろ？理由』
フランシスは急に真面目になり菊に問う。

「……………さすがフランシスさんですね。鋭いです」

菊は降参したように溜め息をついた。

「その通りです。この屋敷から出なかったのには重要な理由があります」

『やっぱりな……………』

フランススは声を暗くする。

『まあいいや、その理由は今度聞かせて』

「わかりました、本当はもう少し身を潜めてようと思っていたのですが……………」

菊は瞼を閉じて、昨日のことを思い出す。

突然、自分の前に現れた金髪に青い瞳の元気な青年。

「アルフレッドさんがこの家に来たことによって私はこの家に引きこもるのをやめました」

アルフレッド・F・ジョーンズ。

彼は菊と昨日会ったばかりなのに菊のことをとても信頼していた。まるでずっと前から一緒にいたように。

『アルフレッドが原因で菊は引きこもるのをやめたわけか、なんか悪いことしたな』

「いえ、アルフレッドさんのおかげで私は今の外の世界を知ることが出来ましたし。それにアルフレッドさんは王耀^{ワンヤオ}さんに言われてここに来たわけですし……………」

『ま、耀も暇つぶしにアルフレッドを行かせたんじゃねーの?』

フランスは困ったように呟いた。

「暇つぶし……………ですか」

菊は真っ暗な空を見上げる。

『暇つぶしにしちゃあものすごいことになっちゃったけどな』

「私も驚きました」

菊は空を見上げながら行った。

「私の屋敷はある条件を満たした人にしか入れない空間にあります。私は屋敷に入る人達は全員把握しているつもりでした」

『でもアルフレッドはその人間達の中に入っていないにもかかわらず普通に菊の屋敷にやって来た、ってわけか』

「……………はい。私は長年生きていましたが……………あんなに驚いたのは久しぶりでした」

『そうか。菊でもびっくりすることあるんだな』

電話の向こうでフランススが笑う。

「私だって驚きはしますよ。なんたって……………」NOoooooooooooo
「……………」

台所から突然、アルフレッドの叫び声が聞こえてきた。

『お、な、なんだ？』

その声はフランスにも届いたらしい。

「すみません、きります」

菊はフランスに一言謝ってから電話をきった。
菊は携帯を握り、台所に走っていった。

「アルフレッドさん！？どうかなさいました……………か……………」
「き、菊！！Help！！」

台所に着くとコンロでは鍋からお湯が噴き出しアルフレッドがパニックっていた。

「お、落ち着いてください！火を止めて……………」

「火ってどうやってとめるんだい！？」

「コンロの下にあるつまみをひねって……………」

「お湯が邪魔するんだぞ！！あつつつ！！」

「と、とりあえず水を……………」

その後、火はなんとか消せてお湯も溢れ出さなくなったがその日の夕食はおにぎりだけになったという……………

「お腹空いたんだぞ……」

「我慢してください」

Episode 10

夕食を済ませ、アルフレッドは畳の上に寝っ転がってテレビを眺めながらせんべいをかじっていた。

菊は夕食の片付けを終わらせて正座してお茶を飲んでいる。

テレビではお笑い番組がやっていてテレビの中の芸人が何かを披露するたびにアルフレッドは大爆笑する。

「H A H A H A H A ! ! なんだいそれ！おもしろすぎるんだぞ！！」
アルフレッドにつられて菊も静かに笑っている。

やがて時計は9時をまわり、お笑い番組は終わりなんだかよくわからないドラマが始まって退屈になったアルフレッドは菊に話しかけた。

「そっいえば菊、君って何歳なんだい？」

見た目はアルフレッドより年下に見えるが気になったため聞いてみた。

「そうですね……………忘れてしまいました……………」

菊は少し考えた後、答えた。

「忘れたって……………そんなに歳とってるのかい？」

「まあそういうことです……………」

菊は机の上に置いてある皿からせんべいを取りかじる。

「アルフレッドさん……………今日、私の家に来る前に何かありましたか？」

菊は声を落としてアルフレッドに聞いた。
菊の表情は何か思い悩んでいるように見えた。

「何かって……………？」

「森で誰かに話しかけられたり……………しましたか？」
アルフレッドは菊に問われすぐに答えられなかった。

もし本当のことを言ったら菊に何か迷惑をかけてしまうかもしれない。それだけは嫌だった。

「べ、別に……………」

「では手を見せてください」

「げ……………」

今は手は手袋をしていて隠れている。
アルフレッドは仕方なく手袋を外し両手を菊に見せた。

「……………」

アルフレッドの右手は森で出会った少女に掴まれた跡が痣となって残っていた。

菊はそれを黙って見ている。

アルフレッドは仕方なく話すことにした。

「今日……………菊の家に来る時に森で和服を着た女の子に会ったんだ。その子は人を探していて特徴を聞いたらその子が探している人の特徴が菊と同じだったからもしかしたら……………、って思ってた。ら女の子はいきなり俺の手を掴んできて……………」

「こうなった、と……………」

菊が悲しそうな目をしてアルフレッドの右手を握る。

「すみません……………」

そして菊は頭を下げアルフレッドに謝った。

「な、なんでだい！？菊は悪くないし……………」

「いえ、そのこともさっきのこととも全て私の責任です」

「さっきの……………」

アルフレッドはさっきあんなことがあったのに完全に忘れていた。
平和な奴だ。

「そういえばさっきの一体なんなんだい？教えてくれないかい？」

アルフレッドはさっきの不可解な出来事について菊に聞いてみる。

菊はしばらく黙っていたが口を開いた。

「アルフレッドさんも関わってしまったことですし……………わかり
ました、お話ししましょう」

菊はお茶を飲み干すとアルフレッドの顔を真っ直ぐ見つめた。

Episode 11

菊はゆつくりと丁寧に話しはじめた。

「先ほど私達を襲ってきたもの………その輩は『やから邪鬼_{じゃっき}』と呼ばれています」

「ジャツキー？」

「邪鬼です。カンフーはできません」

アルフレッドの間違いを菊は冷静に正す。

「邪鬼は簡単にいえば妖怪や怪物のようなものです」

「よ、妖怪だつて!？」

幽霊やら妖怪などの類が大の苦手なアルフレッドは顔を青くする。

「そ、そんなものが本当にいたなんて………嫌なんだぞ」

「残念ながらルーカスには大量の邪鬼が散らばっていますよ」

やばい、一瞬目の前が真っ暗になった。

アルフレッドはぼーっとする頭を叩いて無理矢理停止しかけている脳を起こす。

「邪鬼は人々に危害を与え、不幸にします。ときには人を“死”に至らしめることもあります」

「“死”に……………!？」

「はい。邪鬼はそのことから『狩人^{かりびと}』と呼ばれることもあります」

「狩人……………?」

「人を狩る、という意味です」

菊は目を伏せる。

「邪鬼は昔まで山奥に身を潜めて暮らしていました。しかし2000年前に邪鬼は突然ルーカスの人々を襲い始めたのです」

菊は悲しそうな表情を浮かべていた。

なぜ邪鬼はルーカスを集中的に襲うのだろうか？
アルフレッドは疑問に思った。

「そしてアルフレッドさんが出会った少女……………それも邪鬼です」

あの子が……………邪鬼……………!？」

「で、でも邪鬼は怪物とかだって……………あの子は普通の人間だったよ!？」

「邪鬼は別の生物に姿を変えろという特殊な能力を持っています。邪鬼にとっては人間の少女に姿を変えろことなど簡単なことなので

すよ」

アルフレッドは何も言えなくなってしまった。
しかし菊は話すのをやめない。

「その少女の姿をした邪鬼は森に入ってきたアルフレッドさんに目をつけたのでしょうか」

「じゃあ……………さっきの変な笑い声や俺と菊を意味がわからない生物に襲わせたのは……………」

「その少女です」

菊はきつぱりと言った。

理解できないことが多すぎる。邪鬼？狩人？意味がわからない。

「……………今日はこれくらいにして寝ましょうか……………お布団しますね」

困惑しているアルフレッドに気付いたのか菊は話すのをやめ、押し入れから布団を取りだし菊の布団とアルフレッドの布団を座敷に敷いた。

「今日はいろいろあって疲れましたよね。ゆっくり休んでください」

菊はアルフレッドが布団に入っただのを確認すると電気を消して自分も布団に入った。

アルフレッドは真っ暗になった部屋の天井を見つめながら頭の中で様々なことを考えていた。

なぜ菊はこんなにいろいろなことを知っているのだろう。
なんであの少女の姿をした邪鬼は菊のことを探していたのだろう。
なんで菊は邪鬼やいろいろなことを俺に話してくれたんだろう。

様々な疑問がアルフレッドの頭の中でぐるぐると回り続ける。

そしてアルフレッドが1番気になること……………

アルフレッドは隣ですーすーと寝息をたてる菊を見た。

菊は一体……………何者なのだろう……………

Episode 11 (後書き)

この話は順調に進んでいて1時間もかからないうちに出来上がると思っていたら謝ってクリアボタンを押してしまい画面は執筆中の小説の画面から待受へ…………… (ヘタリアの)

マジで心が折れた瞬間でした。

てことでもう絶望的な気持ちのまま即効でこの話を執筆したのでおかしい部分が多々あるかもしれませんが温かい目で見てください…

……

感想お願いします!!

Episode 12

「う、うーん……？」

アルフレッドは窓から差し込む朝日が眩しくなり目を覚ました。隣で寝ていたはずの菊はもうすでに起きているのか、布団が丁寧にたたまれた状態で置いてあった。

体を起こして時計を見るとまだ7時だった。

アルフレッドは基本10時に起きるため二度寝しようと布団をかぶった。

「ううー………寒いなあ………」

アルフレッドが布団の中で縮こまっていると

グウ………

「あ………」

アルフレッドのお腹から小さいけどはつきりと聞こえる音が鳴った。よく考えてみるとアルフレッドは昨日なんだかんだで夕食におにぎりしか食べてないから今、結構お腹が空いている。

「腹減ったんだぞ………」

アルフレッドは再び体を起こして呟く。
そんなアルフレッドのいる部屋に台所の方からいい匂いがただよってきた。

「？なんなんだいこの食欲をそそるいい匂いは……」

アルフレッドは布団から出て着替えた。

着替えてから部屋から出ると台所の方で音がする。

木の床を軋ませながらアルフレッドが台所に行くと中では菊が何かを作っていた。

「あ、おはようございます。よく眠れましたか？」

入口からよだれをたらしながら覗くアルフレッドに気付き菊が笑顔で挨拶をした。

「うん！もうぐっすり寝過ぎて今夜眠れなさそうだよ！」

実際アルフレッドは今眠くて仕方がない。

「今、朝ごはんを作っていますので待っていてください」

菊はそう言つと朝飯作りを再開した。

「わかったんだぞ！」

アルフレッドは返事を元気よく返事をして、暇だから庭に出ることにした。

庭にでると鳥が木にとまっていたり、池が朝日に反射して輝いたりしていた。

「うーん、気持ちいい朝なんだぞ!!」

アルフレッドは背伸びをしながら言った。

森は朝日が差し込んで昨日の夜とは違い明るい。
アルフレッドは縁側に座りのんびりする。

「わふっ」

「おおおおお!!?」

突然隣から何かの鳴き声が聞こえてきてアルフレッドは文字通り飛び上がった。

隣を見ると毛がもふもふとしたかわいらしい犬がアルフレッドを見つめていた。

「き、菊の犬かな……?」

アルフレッドは犬に触る。

もふもふとしていとても気持ちいい。

犬も大人しいらしくしつぽを優しく振って喜んでいる。

「かわいいんだぞ!」

アルフレッドは犬を持ち上げて抱きしめる。

「アルフレッドさん、朝食の準備できましたよ」

「あ、菊！ーわかったんだぞー！」

犬とじゃれながらアルフレッドは答える。犬は菊に気付き菊のもとに走っていった。

「おや、ぼちくんではないですか。今までどこで遊んでいたのですか？」

自分の所に走って来た犬を抱きかかえ、菊は犬の頭を撫でる。

「やっぱり菊の犬なのかい？」

「はい。ぼちくんです」

「わふっ！」

ぼちくんは元気よく返事する。

「さ、朝食にしましょうか」

ぼちくんを抱えたまま廊下を歩き出す菊をアルフレッドは追いかけた。

Episode 13 (前書き)

かなり間が空いてしまいましたね；
すいません；；

Episode 13

「あ、そういえば菊」

「?はい、なんでしょう」

アルフレッドが焼き魚を食べながら菊に話し掛ける。

話し掛けたといってもただ暇だったから話し掛けただけだった。
ということでした話し掛けたはいいが当然のことのように話題に困って
しまうアルフレッド。

とりあえず今アルフレッドが1番気になっていることを聞いてみた。

「菊、君って何者なんだい？」

「……………え？」

普通、朝食の時に話す話題じゃないのをアルフレッドはバカ……………

…じゃなくて大バカなので知らなかった。

これには菊も素っ頓狂な声を出してしまう。

「な、何者か、と言いますと？」

「いやーなんか菊、俺の知らないことたくさん知ってるし……………」

あと邪鬼のことなんかも詳しいし………なんでかな？って思ってた
」

アルフレッドは味噌汁をずそと飲む。

菊はアルフレッドの言葉にまだ動揺を隠せていない。

「え、いや………私の先祖がそういうのを被っていた、からですかね？」

「そうなのかい！？あんな凶暴な奴らを！？」

「え、あ、はい」

菊は戸惑いながらも答える。

「なあんだ！もしかしたら菊も人間じゃないかもー！って考えてたよ俺！」

「わ、私が？」

菊は驚いた表情になる。

「だってさ、邪鬼をすぐに倒しちゃうしさ！！どんな状況でも冷静にいられるし！」

「そ、それは………」

菊はお茶を飲み、ため息をつく。

「ま、また今度、菊のこと教えてくれよな！」

アルフレッドの言葉に菊の目がわずかに見開いた。

「……………はい」

菊は小さく返事をした。

アルフレッドは菊の返事を聞いて笑うと朝食を食べはじめた。

「いつか……………話せるといいですね……………」

菊はアルフレッドには聞こえないような小さな声でそう呟いた。

「菊、俺そろそろ帰るよ！」

「あ、はい。送りますよ」

「Thank you!! またあんなのに襲われるのは嫌だからね」

菊は立ち上がりいつものように刀が入った袋を持った。

今回は何事もなく森の出口まで辿り着くことができた。

「家までお氣をつけてお帰りくださいね」

「うん！あ、そだ！菊、俺ん家に来ないかい！？」

アルフレッドが笑顔で菊に聞いてくる。

「アルフレッドさんの家、ですか？」

「まあ正確にはアーサーの家なんだけどね！菊は俺の友達だしアーサーやフランスに紹介したいんだ！！」

アメリカが先に森から出て菊に手を差し出す。

菊はしばらくその手を見つめていたがやがて悲しそうな顔をして後

るに一步下がった。

「……………菊？」

アルフレッドが菊の様子に首をかしげた。

「……………すみません、アルフレッドさん……………。私は行けません……………」

「……………え？」

アルフレッドは手を菊に差し出した引っ込ませた。

「よ、用事があつたかい？」

「いえ、ただ行けないんです」

「行けない……………って？」

菊はさらに悲しそうな顔をした。

「気にしないでください……………」

「そ、そうか……………じゃあ菊が来れる日においでよ!…」

「あ……………はい。その時はお邪魔させていただきます」

菊はいつものように笑った。

「いつか絶対に来てくれよ！じゃ、B y e B y eなんだぞ！」

アルフレッドは手を降りながら走っていった。

「いつか……………ですか。行ける日が来るといいですね……………」

菊はそう呟くと家に戻っていった。

家について菊はすぐに電話のある所へ行き、受話器を取ってある人物に電話をかけた。

「……………もしもし、私です。本田菊です。少しお願いがあるのですが……………よろしいですか……………」

そう電話の向こうに話す菊の表情は深刻だった。

Episode 14

「うーん……このまま家に帰っても暇なだけだしなー………どこかに行くってなってもなー………」

アルフレッドが街をぶらぶら歩きながら呟く。

「あれ？アルフレッドだー！！」

「？」

振り返るとそこには茶髪のニコニコした表情の青年と、金髪のムキムキした青年が立っていた。

「フェリシアーノとルートヴィッヒじゃないか！」

「冬にお前が外に出るなんて珍しいな」

金髪をオールバックにして青い瞳の青年、ルートヴィッヒ・バイルシュミットは驚いた顔で言った。

「アルフレッド何してるのー？散歩？」

茶髪でくるんを出した青年、フェリシアーノ・ヴァルガスは手を上下に動かしながらアルフレッドに聞いてきた。

「あー、ちょっと友達の家に行つててね。その帰りだよ」

「へー!!あ、今俺達おいしいレストランに食事に行こうと思ってるんだけどアルフレッドもどう?」

「おいしい食事かい!!?行くんだぞ!!」

「そうか。では三人で行こう」

三人は並んで歩き出した。

歩いていると前方に人だかりが出来ていた。そこには警察と思われる制服を着た人も所々にいて、近くにはパトカーもとまっていた。

「?なんだいあれ……?」

「ヴェー?」

「何かあつたのか?」

三人はそこに近づいていった。

アルフレッドは人をかきわけ、人だかりの原因を見ようとした。

なんとか人をかきわけてアルフレッドはその人だかりの原因を見ることができた。

「こ、れは………!?!」

アルフレッドは目を疑った。

人だかりの中心にいたのは……………

体から血を大量に流して倒れている女性だった。

「つぶはー！ やっと出れたー…………… ってヴェー！！？」

「な……………」

アルフレッドのようにひとごみをかきわけ、やって来たフェリシア
ーノは女性を見て驚き、ルートヴィッヒは言葉を失ってしまう。

「な、んだいこれ……………！！？」

「こ、怖いよー！！！」

フェリシアーノが泣き出す。

「落ち着けフェリシアーノ！！！」

ルートヴィッヒは混乱しているフェリシアーノに言う。

「なんでルーカスにこんなことが……………」

今までまったく事件や事故がなかった平和な街・ルーカスにこんな
ことが起きるなんて……………

その場にいる人は全員そう思っていたに違いない。

アルフレッドは最初これは夢かと思ったが頬をつねったら痛かった。これは夢じゃない。アルフレッドは確信した。

「ほら、どいて!」

女性が救急隊員によって救急車に運ばれていく。

遊んでいたおもちゃが取られてしまった子供のように人だかりを作る原因がなくなった途端、人だかりはくずれていった。

しかしアルフレッドとフェリシアーノとルートヴィッヒの三人はずっとそこに立ち尽くしていた。

Episode 14 (後書き)

ルートヴィッヒは本来名字ないのですがフェリシアーノとかあるのにルートだけないの少し変かなー、と思いバイルシュミットという名字にさせていただきました。

なぜバイルシュミットにしたかというといずれ出るあの人と兄弟だからですw

Episode 15 (前書き)

かなり短いですw

Episode 15

「ただいまなんだぞ……」

アルフレッドは家に帰ってきた。

あのあと、フェリシアーノとルートヴィッヒとアルフレッドの三人でレストランに行く予定だったのは中止にしてアルフレッドは家に帰ってきたのだ。

「アルフレッド!!」

アーサーが慌ただしく靴を脱いで家に入ってきたアルフレッドのもとに走ってきた。

「アーサー? どうしたんだい?」

「どうしたもこうしたもねえよ!! お前なんで昨日帰ってこなかったんだよ!!」

「え? 菊の家に泊まるって……電話したんだけど……」

「はあ? 電話?」

アーサーが太い眉をひそめる。

「ああアーサー昨日酔っ払ってたからな、覚えてないんだろ」

フランススがリビングから出てきてアーサーに言う。

「あ、そういえばアーサー酔っ払ってたね」

「酔っ払ってねえよ!!」

「認める、元ヤン」

「元ヤン言うな!!何さりげなく言ってるんだよ!!」

「え?アーサー元ヤンだったのかい?」

「そうなの!もうホント手つけられなくて、お兄さん心折れそうだった!!」

「ああああ!!黙れ変態!!」

「変態言うな!!」

アーサーとフランススはいがみ合いを始めてしまった。

アルフレッドは呆れ顔で二人から離れて自分の部屋に行こうとした。

「あ、ちょっとアルフレッド待て」

しかし突然、アーサーに呼び止められた。

わざわざアーサーはフランススとのいがみ合いを中断している。

「なんだい?いきなり……」

アルフレッドが聞き返すと、アーサーは驚くべき言葉を口から発した。

「今後一切、これから菊の家には行くな。」

Episode 16 (前書き)

時間がなくて二週間ぶりだといつのに1話しかできませんでした…

……

すいません)・・(

Episode 16

「ど、ういうことだい……………」

なんとか声を絞り出してアルフレッドはアーサーに聞く。

「そのままの意味だ」

アーサーは冷たく返した。

「もう菊の家には行くな。絶対だ」

アーサーはそれだけ言うとりビングに入っていつてしまった。

アルフレッドはまだアーサーの言葉の意味が理解できずにその場に立ち尽くしていた。

「はあ、アーサー本当不器用だな……………」

フランシスが頭をかきながらアルフレッドの肩に手を置いた。

「ま、とりあえずだ。しばらくは菊の家には行くな。」

「で……………も、菊は……………」

アルフレッドの声は震えていた。

フランスはそんな様子のアルフレッドの頭を撫でた。

「少しだけの間だ。アーサーのことだから自分の言ったことなんか一週間で忘れるだろ。」

フランスが笑った。

「フランス……………」

「あ、あと。今日、街で事件あっただろ？気をつけるよ」

フランスはそう言って自分の部屋に入ってしまった。

「……………寝よう……………」

アルフレッドはそう呟いて自分の部屋へと歩いていった。

何日たっても街では毎日のように血を流して人が倒れていた。警察はこれを『連続通り魔事件』として捜査を進めているらしい。しかし、犯人はわからないままだった。

テレビのニュースではこの事件の事ばかりやっていて、もう街でこの事件を知らない人はいないだろう。

アルフレッドはずっと外に出ていなかった。

毎年冬になったら家にこもりつきりだったが、今年は自分でも驚くくらい外に出ていた。

菊という、友達に会うために　。

アーサーに菊の家に行くな、と言われてもう二週間近く経っていた。しかしアーサーはまだアルフレッドが菊の家に行くことを許さなかった。

初めの方はアルフレッドはアーサーに対して反発していたが最近反発してこなくなった。

というか、アルフレッド自身が部屋にこもって食事や、お風呂の時間くらいしか部屋から出て来なくなった。

そんな日が続いたある日、フランシスは思い切って新聞を読みながら紅茶を飲んでいるアーサーに言った。

「おいアーサー。いい加減にしたらどうなんだ？」

フランスの言葉に、アーサーは紅茶をテーブルに置き、フランスに聞き返す。

「何がだ」

「アルフレッドのことだよ」

フランスがアーサーの向かいの席に座って、アーサーを見る。

「いつまでアルフレッドを菊の家に行かせないつもり？」

「前にも言っただろ。これからずっとだ」

アーサーが新聞から目を放し、エメラルドグリーンの瞳でフランスを睨んだ。

「どうして、そんなことを……………」

「俺の勝手だろ」

「アーサーの勝手でアルフレッドと菊を引き離す、っていつの？いくらアーサー、友達がいないからってそれはひどすぎるんじゃない……………」

「友達いないは余計だバカ！！」

アーサーがフランスに怒鳴る。

「でもこのままだとアルフレッド、ずっとあのままだぜ？アーサーはそれでいいのかよ」

「俺の知ったこっちゃねえよ」

「だってアルフレッド、今は冬休み中だけど学校が……………」

「だから俺の知ったこっちゃねえって」

「だってアーサー、一応学園の生徒会長だし……………」

「一応ってなんだ、一応って」

握り拳を固めて、もうすぐでキレるぞオーラを出しているアーサーからフランスは少し離れた。

「生徒会長がどうこうする問題じゃねえだろ。生徒会の責任だっていうなら仮にも生徒会副会長のお前がなんとかしろ！」

「めんどくさいからやだよー」

「じゃあ最初っから言っつな！！」

いつものように喧嘩を始めるアーサーとフランス。

ワイン野郎だの元ヤン紳士だの、汚い言葉が飛び交う。

「君達うるさいよー。寝れないじゃないか」

突然、リビングの入口の方から聞こえてきた声にアーサーとフランシスは驚いて動きを止める。

二人が入口の方を見ると呆れた顔をしてこっちを見ているアルフレッドがいた。

「な……………アルフレッド！？どうしてお前、部屋から……………」

「なんだいその言い方は！人を引きこもりみたいに言わないでくれよ……！」

『『いやお前今まで引きこもってたんですけど……………』』

珍しくアーサーとフランシスの考えていることが一緒になった。

「でもアルフレッド、ずっと部屋から……………」

「ああ、ちょっと気分がブルーだったからね。でも、もう立ち直ったんだぞ……！」

冷蔵庫からコーラを取り出して笑顔で言うアルフレッド。

「そ、そうか……………よかった……………」

フランシスがまだ驚いた表情のままアルフレッドに言った。
アルフレッドはまた笑うとソファーにかけてあった自分のジャケットを取って、羽織った。

「どこか出掛けるのか？」

「うん！暇だからね」

袖に腕を通し、アルフレッドはリビングのドアのドアノブに手をかけた。

「菊の家には、行くなよ」

アルフレッドがドアノブを回す前にアーサーが言った。

「ちょ、お前……………」

フランシスがあわててアーサーの口をふさぎ、アルフレッドを見る。

アルフレッドは動きを止め、アーサーを少し睨んだ。
アーサーも睨み返す。

するとアルフレッドはいつもと同じ表情に戻り

「まったく……………アーサーはしつこいんだぞ！行かないよ！」

アルフレッドはそれだけ言つとりビングを出て行った。

Episode 17 (前書き)

あけましておめでとついでいます!!

今年もこのダメ小説をよろしく願います!!

Episode 17

玄関の扉を閉め、扉に寄り掛かりながらアルフレッドは大きなため息をついた。

「バレバレだったんだぞ……………アーサーに……………」

そう、アルフレッドはまだ諦めていなかった。

今日だって黙ってればバレないんじゃないかね？ 的なノリで菊の家に行く気満々だったのだが、アーサーはアルフレッドの脳を覗いたんじゃないかと思うくらいお見通しだった。

「ちえ、早く菊と遊びたいのになあ……………」

口を尖らせながらアルフレッドは家から出た。

街を歩いていると、見覚えのある青年二人が前を歩いていた。

「フェリシアーノ！ ルートヴィッヒー！！」

「……あ！ アルフレッド！」

二人がアルフレッドに気付き、フェリシアーノが走ってくる。体の動きに合わせて、フェリシアーノのくるんも一緒に揺れる。

「フランス兄ちゃんがアルフレッドがずっと部屋から出てこないって……………」

「あ、ああ。もう大丈夫なんだぞ！」

「体調でも崩したのか？」

「いや、俺はずっと元気だったんだぞ！！！」

アルフレッドは自分を心配する二人に笑顔を見せた。

それを見た二人は安堵したような表情を浮かべ、笑顔になった。

「そうだアルフレッド！！この前行けなかったレストラン行こう！！！」

「そうだね！行こう！」

「ルートも！早く！！！」

「あ、ああ」

三人は並んで歩き始めた。

三人はフェリシアーノおすすめのレストランに来ていた。
外装も内装も綺麗で落ち着いた感じの店だった。

「俺、ここのパスタ大好きなんだあ!!」

フェリシアーノがメニューのパスタの写真を指差しながら言った。

「うまそうだな。俺もパスタにしよう」

「あ、俺はハンバーガーがいいんだぞ!」

ウェイトレスに注文をした後、アルフレッド達は世間話で盛り上がっていた。

その世間話は、だんだんルーカスで起こる事件の話へとなっていた。

「そういえばさ、この前通り魔に襲われた人、大怪我だったんだって……」

フェリシアーノが少し悲しそうな顔をしていった。

「最初の方は被害者は軽い怪我だったんだけどな。日が経つにつれて被害者の状態はひどくなっていつている」

「いったい犯人は何をしたいんだい？」

注文したコーラをストローで飲みながらアルフレッドは言った。

「通り魔だからな。意味もなく人を傷付け楽しんでいるんだろう。」

「ヴ、ヴェー……………怖いよ……………」

ルートヴィツヒの言葉にフェリシアーノが涙目になる。

「大丈夫だ。今回の通り魔が動くのは夜と決まっているんだ。夜に外に出なければいいんだ。」

「う、うん……………」

少し顔を青くしながらも頷くフェリシアーノ。

「犯人……………捕まるといいんだぞ……………」

「うん……………」

「そうだな……………」

三人は俯いた。

「お待たせしましたー」

そんな時、料理が来てアルフレッド達は美味しそうに料理を食べはじめた。

その時はもう事件について話したことはすっかり忘れていた。

Episode 18

アルフレッド達がレストランで料理を食べ終わる頃には、辺りは暗くなってきていた。

「冬は暗くなるの早いねー」

「そうだな……………」

フェリシアーノとルートヴィッヒがそう呟く。

「それでは帰るとするか」

「了解であります隊長！！アルフレッド、一緒に帰ろー！！」

「あ、大丈夫なんだぞ！家近いし」

「そっかー……………じゃあまたね！！」

「うん！」

フェリシアーノとルートヴィッヒは二人並んで帰っていった。
アルフレッドは二人を見送ってからある所に向かって足を進め始めた。

友がいる、

『名もなき森』に向かって

アルフレッドが森に向かっていくにつれて、辺りはどんどん暗くな
っていった。街の街灯がうつすらと明かりをともしはじめる。

アルフレッドが森の入口に着いた時はもう辺りは真っ暗になってい
た。

入口から中を見ると中はもう真っ暗で何も見えなかった。
しかし風が吹くたびに暗闇の中からザワザワと木々が揺れる音がす
る。

いかにもお化けが出そうだ。

「こ、こんな不気味な場所なんて聞いてないんだぞ……………」

お化けが大の苦手のアルフレッドはこの中に入るとはもちろん恐
かったが、がんばって入ることにした。

その時、突然アルフレッドの腕を誰かが強く掴んだ。

「えっ！！！！？」

驚いて後ろを見てみるとそこには自分の家の主、アーサーがアルフレッドを腕を掴んで睨んでいた。

「菊の家には行くなと言っただろ！！！」

アーサーが怒鳴る。

「だ、だって……」

アルフレッドは言い訳を必死に考えようとするが、なかなか思い浮かばない。

「帰るぞ」

アーサーがアルフレッドの手を引く。

「ま、待ってよ！！菊に………」

「会っなくなって言っただよ俺は！！！」

アーサーがまた怒鳴る。

「なんでだい！？なんでアーサーは俺を菊に会わせてくれないんだい！？」

「っ…………それは…………」

「アーサーが友達いないからって俺も巻き込もうとするなんてあんまりだよー！」

「ちげえよー！友達いない言っなー！」

「え？じゃあいるのかい？」

「ぐっ……………」

友達がないアーサーは当然のように何も言えなくなる。

「やっぱいないんじゃないか……………」

「……………う、うるせえー！ほら帰るぞー！」

アーサーはアルフレッドを無理矢理引っ張って帰っていった。

アルフレッドとアーサーが森の入口で散々騒いで帰っていった後、一人の青年が犬を抱えながら森の入口の近くに立った。

「……………アルフレッドさんとアーサーさんが来たようですね」

「わふっ」

青年　　菊の言葉に腕の中のぽちくんが答える。

菊は少し困ったように笑った。

「相変わらず騒がしい方達ですね。声が私の家にまで聞こえましたよ」

「わふう……………」

「まあ……………」

菊が振り向いて森の中を見た。ただ木々が風で揺れる音だけが聞こえる。

「おかげでこの森に住み着いていた弱い邪鬼が逃げてくれましたけどね」

「わふうっ!!」

菊がそう言った時、突然ぽちくんが地面に降りて森の入口に向かって吠えはじめた。

「ぽちくん？」

「相変わらずぽちは気配を感じるのには得意あるな。さすが菊の犬ある」

「!?!」

森の入口に一人の青年が歩いて来た。

その青年は長い髪を一つに結び、チャイナ服を身に纏っていた。

「……………ワンヤオ王耀さん……………」

「久しぶりあるな、菊」

耀^{ヤオ}は菊を見て、微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2082x/>

【APH】パズル

2012年1月8日21時45分発行